平成 29 年度第 2 回図書館セミナーを開催しました！

平成 29 年 7 月 31 日(月)医学図書館 1 階ブラウジンングコーナーにて中根裕信先生（医学科解剖学）を講師に第 2 回図書館セミナー「しる：探る 気づく 理解する」を開催し、「麻酔」に焦点をあてお話しがありました。

夕食後、吐き気や呂律が回らず意識を失って入院し、その後、約 1 日の間、瞳孔は開いたままで、呼びかけには答えず意識を失った状態が続いた食中毒の患者さんの話しから始まりました。野生のゴボウと間違ってチョウセンアサガオの根を「きんぴらゴボウ」にして食べたため、アトロピン中毒であったそうです。チョウセンアサガオの根、種、つぼみ(順番にゴボウ、ゴマ、オクラと間違われやすい)、その他にイヌサフラン、スイセン等(ギョウジャニンニク、ニラと間違う)を写真で比較し提示され、これらの植物の食中毒の患者さんを担当するかもしれないから参考にと話されました。

これほど深い意識を失う状態(チョウセンアサガオによる)を、外科手術の「麻酔」として応用したのが、華岡青洲(1760-1835)でした。青洲はエーテル麻酔が使用されるよりも約 40 年も早い 1804 年に、チョウセンアサガオ、トリカブト等を原料として「麻沸散」を開発しました。この麻酔法は、青洲が乳ガンなどの外科手術で患者さんに苦痛を与えることがないようにと強く願ってできたもので、様々な困難と自身の母や妻の犠牲の上に成されました。青洲の遺した言葉に、「内外合一(内科と外科を区別せず学び、必要に応じて用いる統合医療)」、「活物窮理(個々の患者の中に真理があるから、よく観察して患者の病の特質を見極めないといけない)」があり、青洲のもつ柔軟性・謙虚さと実証的な態度が伝わってきます。青洲は、地位の高い藩医となっても一般の患者の診療を続け、多くの門下生の指導にも当たり、皆から慕われていました。

医療を変えていくものは、患者さんのことを思う想像力をもち、よりよい医療を実践しようとする実行力をもつ医療人が、創意・工夫をこらし医療技術を開発することによって成されるものと感じられました。皆さんが、このような医療人になるための豊かな人間性を身につけるために、図書館の資料を利用していただきたいとのお話をいただきました。

参加者からは「薬の神経作用を覚えるのに良いと思いました」、「(お話をいただいた)ギョウジャニンニクとイヌサフランを間違えて取らないように注意を受けたことを思い出しました」と実感が湧く身近な体験を交えた感想をいただきました。

参考文献：「華岡青洲と麻沸散」，松木明知著，真興交易医書出版部
「まんが 医学の歴史」，荒木保著，医学書院

医学図書館では、学生さんに人体への理解を深めていただき、幅広い教養と人間力を身に着けていただく契機となるよう今後もこのような企画を計画して参ります。皆様のご来館をお待ちしております。